simc News Letter
Sendai International Music Competition
2025年5月26日号
仙台国際音楽コンクールニュースレター
第9回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ヴァイオリン部門 2025.5.24（土）～6.8（日） ピアノ部門 2025.6.14（土）～2025.6.29（日）

第9回仙台国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門レポート

予選 2日目　2025年5月25日（日）

音楽ジャーナリスト：正木 裕美

ヴァイオリン部門予選の2日目は、予定していた12名のうち、辞退者1名を除く11名が出場した。引き続き、モーツァルトのアダージョ、ロンドにおける管弦楽は室内楽編成の仙台フィルハーモニー管弦楽団（2グループ）と山形交響楽団が務め、出場者の音楽性に柔軟に寄り添った。

これは前日にも言えることだが、イザイの5番は冒頭の音色ひとつとっても、震えるような繊細さか、もしくは悠々としたヴィブラートか、好みが分かれて興味深い。やはりこの作品がテクニックを計る大きな指標となり、技巧の羅列に留まらない構成力の有無は、奏者の力量による。

モーツァルトのロンドでは前日のような顕著な齟齬は見られず、様式美かロマンティシズムか、といった嗜好が露わになった。

紙幅の都合で限りはあるが、2日目は順を追って演奏の特色を振り返りたい。

ムン・ボハ（韓国）のイザイは第1楽章は「曙光」で淀みなく流れを意識していた一方、第2楽章「田舎の踊り」では、リズムの停滞やピツィカートのムラなど、重音で技術面の課題が散見された。アダージョは甘美でやや主情的。ロンドでは細かい音型でやや急ぐ傾向が見えた一方で、落ち着いた間の取り方や旋律運びがアンサンブルで生きる場面もあった。

クライスラー国際コンクールで2位を受賞した吉本梨乃（日本）は、濃厚な音色と力強さが身上。イザイの分散和音と重音の応酬も、重たくならず、山場を見据えた推進力が途切れない。モーツァルトでは、時にテンポを揺らしてロマンティックにヴィブラートを用いたアダージョに対し、ロンドでは相対する旋律を呼応させる構成力も見られた。個人的には、前面に出てくる力強さの中に、モーツァルト特有の軽やかな様式感や、イザイで少し引いて奏でる余裕が欲しかった。

ミヒャエル・ノーデル（ドイツ／アメリカ）はイザイにおける付点のないリズム、モーツァルトにおける半音の差異など、譜面の違いが気になった。イザイはテクニック的に余裕も見られたが、技巧の羅列から一歩踏み込んだ表現があればどうだっただろう。一方でモーツァルトではロンドの軽快な運びが際立ち、速いテンポ設定においても、モーツァルト作品の匠、山形交響楽団との爽快なアンサンブルを聴かせた。

ヤニス・グリソー（ルクセンブルク）はイザイにおいても明確な作品構成を持ち、技巧面それ自体を表現の目的とせず、曲想を表出するための手段として難なく扱う。アダージョにおける味わい深さも特筆すべきで、主情的なロマンティシズムとは一線を画し、芯のあるストレートな音色がかえって作品の持つ陰影を引き立てた。呼応するように山響の音色もぐっと深みを帯び、良質なアンサンブルを築いた。

■お問い合わせ／公益財団法人 仙台市市民文化事業団　仙台国際音楽コンクール事務局
〒981-0904 仙台市青葉区旭ケ丘3-27-5 Tel:022-727-1872 Fax:022-727-1873 Email:info@simc.jp URL:https://simc.jp

ジュリア・ジョーンズ（アメリカ）のイザイは重音の上声部が 2 度ほど響かず、また装飾音や細かい音符で粗削りな表現が見受けられた。モーツァルトでは振幅の大きなデュナーミクを施しつつも、繊細でチャーミングな音楽を奏でた。

松木翔太郎（日本）からは作品を俯瞰し構築する力、時代様式への理解が感じられた。長い体躯を活かしたスムーズで素早いボウイングも備えている。イザイの第2楽章は前半で発露したエネルギーと、後半の伸縮自在かつスタイリッシュな対比が印象深い。またアダージョではこっくりとした音色へ変化し、細やかなアーティキュレーションも際立った。ロンドでは瞬発力を伴い、粒立ちの良い音色で感興豊かなアンサンブルを聴かせた。

ツァイ・エリック（台湾／アメリカ）のイザイは独特な解釈が目立ち、第 1 楽章終結部も畳みかけずにゆったりと和声を聴かせるテンポ設定。第 2 楽章では拍節感を強調することで縦の刻みを意識していた。しかしこれが技巧ごとの切れ目を招き、推進力に欠けてしまった感は否めない。モーツァルトはオーソドックスにまとめたが、ともすると単調に感じられてしまい、構成や音色の変化に繋がる表現はやや希薄だったか。

ジナ・ケイコ・フリージケ（ドイツ）も、独自の音楽観による表現が際立った。イザイ第 1 楽章では決然とした力強さでスケール大きく悠々と旋律を紡いだ。一方で第 2 楽章では一気呵成に畳みかけるあまり、技巧面の精度を落としてしまったのが残念。モーツァルトでは様式美や構成よりも優美さに重きを置いた演奏で、切れ目ないたっぷりとしたレガートで悠々と旋律を歌った。

ユン・ヘウォン（韓国）がイザイで見せた滑らかな重音移動は、この 2 日間であまり類を見ない。粗削りな要素もあるが併せて情感豊かな詩情性も持っている。第2楽章のスタッカート＆ピツィカートはどちらかというと全てスタッカートに感じられたが、弾（はじ）いていただろうか？ モーツァルトはストレートな音色で品があり、たっぷり歌うが自己陶酔に陥らず、様式を意識した表現に徹した。その中で、細やかなデュナーミク、調の移ろいを意識したニュアンスの変化など、微に入り細を穿つ表現が際立った。

シーバース・エマニュエル（日本／アメリカ）はフラジオレットや高音のミス、ピッチの揺らぎなど、全体でいくつかミスが重なってしまった点が悔やまれる。一方で音色はたおやかで良く響き、イザイにおける深みを湛えた表現や、ロンドで見せたしなやかな走駆など、美点もあった。

レイ・ハイルイ（中国）はその場で紡ぎ出す音楽に真摯に耳を傾け、間の取り方、呼吸、構成において、高い音楽性がにじみ出ていた。イザイでは大きな溜めや精彩な運指でシャープなリズムを際立たせ、またアダージョではモーツァルトとしての様式美も備えていた。微妙に一歩下がって管弦楽とのコンタクトを密にし、時に溶け込み、時にリードする柔軟で細やかなアンサンブルを繰り広げた。演奏後、ヴァイオリン・セクションの 1 プルト両者に手を差し出したのは彼だけで、オーケストラへ見せた敬意と感謝に、演奏家としての姿勢も垣間見えた。